

会生活が深く工業化に規定されているかを痛感させられるのである。

二点目に、富を地位にかえるための消費、あるいは「街示的消費」という社会現象である。公園をはじめとするアメニティの整備がジェントリ、後には産業資本家による地位のあかしであれば、ミドル・クラスが家事使用人を雇うこともステイタス・シンボルを得るためであり、「生活習慣は社会的に上位のものから下位のものへ伝播してゆく傾向がある」(第八章)とはいうものの、この「*スプレッド*」の洪水には驚かされる。バックス・ブリタニカを謳歌する国ならではのことなのだろうか。

三点目にエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』に描かれる一八四〇年代までのイギリスと対比しながら、それ以降、労働者の生活が混乱の中にも向上していく様子がヴィヴィッドに写し出されており、通説的に言われるイギリス労働運動の改良主義化の社会的背景が紹介者のようなイギリス史の素人にもよくわかるのである。例えばコレラの猛威も一八七〇年代には衛生改革によって鎮静化し、同じ頃、労働者の家庭でも史上初めて食べ物を選択

できるようになってくる。

ところで紹介者が研究している一九世紀の後半のフランスでは、王党派対共和派、あるいは教権主義対反教権主義の対抗が生じ、民衆をまきこんだ深い社会的対立にまで発展している。この対立は第二帝制下に完了する産業革命による社会生活の変化を背景にもつていると紹介者は考えているが、これに対し、本書を読むと同時期のイギリスでは、同じ工業化による社会生活の激変は政治的・社会的対立を鎮静化する方向で作用したという印象をうける。英仏両国の工業化の惹起する変化への対応の違いに心を持たざるをえない。

この著作は、政治史的な見取り図を作成するために、まず路地裏に降り立って考え直してみる重要性を教えているようである。

(A5変型版 二五一頁 一九八二年二月
平凡社 一、七〇〇円)

(上垣 豊 京都大学大学院生)

Louise and Jonathan Riley-Smith,

The Crusades

本書は英訳による十字軍の史料撰集である。

まず序論において、十字軍の定義、背景、歴史、史料の選択規程が述べられる。この序論は興味深い。定義に関して、聖地限定論への反駁に力を注いでいることや、背景を殆ど精神的状況に局限し、経済的なそれを欠落させていることなど、論者によって反発もあると思われるが、これなりに著者の立場は明快であり、この視角は歴史を述べる部分にも貫かれている。現在の十字軍研究の成果はよく押えられており、十字軍についての好個の概説となっている。

次いで、いくつかの項目に分類して史料の抜粋を纂集する。以下、少し冗長になるが、この種の書物の紹介にはそれが有用だと思われる故、収録されている史料を列挙することにする。但し、紙幅の都合から記述はなるべく簡略に留める。

第一章は The Preaching of the First Crusade と題して、クレモン教会会議決議の内、十字軍士に対する贖宥の条項、ウ

ルバヌス二世の書簡四通、クレルモンの演説四種（フーシェ、ロベール、ギベール、ボートリ）。

第二章 The Attraction of Crusading
では、まず The Authority of God として、ギベール・ド・ノジャンの一節、エウゲニウス三世の Quantum praedecessores、インノケンティウス三世のアルフォンソ八世宛書簡、聖ヘルナールの De consideratione、グレゴリウス八世の Audita tremendi、次に The Just Cause として、ジャック・ド・ヴィトリの説教、アルティン・ド・バイリスの説教、La Chanson d'Antioche の一節、スベインに関するカリクストゥス二世の書簡、一一〇八年の対ヴェンド戦への訴え、インノケンティウス三世のヴァルデマール二世宛書簡、アルビジョア十字軍に関するインノケンティウス三世の書簡二通、対シユタウフエン十字軍に関するグレゴリウス九世の書簡、同じくウルバヌス四世の書簡。次に Right Intention として、作者不明の詩 Vos qui ameis de vraie amour、インノケンティウス三世のレオバルト六世宛書簡、インノケンティウス二世の Omne datum optimum、アン

クサンデル三世の Inter omnia、聖ベルナルの書簡二通、ニヴロなる十字軍士の誓約書、アレクサンデル三世の Cor nostrum、グレゴリウス八世による十字軍士保護の承認、聖ヘルナールの De laude novae militiae、最後に Apologetics として、アンベル・ド・ロンの Opus tripartitum。
第三章 The Experience of Crusading
では、まず Proclamation として、インノケンティウス三世の Quia maior、同じく Ad liberandum、次に Preaching and Recruitment として、第五回十字軍に関するインノケンティウス三世の書簡三通、ジャック・ド・ヴィトリの説教、オリファ・ド・ケルンのナミユール伯夫妻宛書簡、コヴェントリーの司教用定式書による十字取得の儀式、牧人十字軍についてのマシユ・パリスの叙述。次に Raising and Spending Money として、イングランドにおけるサラディンの一〇分の一税、インノケンティウス三世の Graves orientalis terrae、一二五〇～五三年におけるルイ九世の支出一覧、アダム・オウ・ジェズモンとエドワード（後の一世）の契約。次に The Appointment of Leaders として、

ヴィラルドゥアンの一節、インノケンティウス四世による教皇特使の任命。次に Preparation and Departure として、ブラバン公アンリ一世の寄進状、作者不明の詩 Por joie avoir perite en paradis、シェンヴィルの一節。次に The Course of Crusading として、一二四七年の渡航規則、エティエンヌ・ド・ヴァランスの二つの幻視、ピエール・テュドボドの一節、ジャック・ド・ヴィトリのホノリウス三世宛書簡、アルティン・ド・バイリスの聖遺物掠奪。最後に Illness and Death として、十字軍士の遺言二通、レーモン・ダギレの一節、オレイユ修道院の記録。

以上、収載する所すべて六三点、前書きによれば、内三分の二は初めて翻訳されたものであり、他も新たに訳し直されている。訳文の当否について全体的に云々することは、現在の紹介者の手に余る。但し、いくつかを取って検討した限り、一部紹介者と解釈の相違もあるが、概ね正確で丁寧な訳である。各々の史料には簡単な解題が付けられており、序論及び解題の叙述中に関連する史料の指示がなされている。収録すべき史料については、他に重要だと思われる

ものも無い訳ではないが、こうした欲を言
えば限りがないであろう。

(一九一頁 一九八一年 London, Edward
Arnold)

(八塚春児 京都教育大学講師)

受贈図書

(一九八一年五月一八日～六月一六日)

COBETCKAJ 3THOTPAΦHЯ 一九八

一一二

釜大史学(釜山大学校史学会) 五

同朋大学論叢(同朋大学) 四二

福岡大学研究所報(福岡大学研究所) 五

一

日本文化研究所研究報告(東北大学) 別

卷一八

研究集録(神戸大学教育学部) 六六

人類学雑誌(日本人類学会) 八九―二

鹿児島経大論集(鹿児島経済大学) 二二

一

経済論究(九州大学大学院) 五〇

国史学(国学院大学) 一一四

龍谷大学論集(龍谷学会) 四一八

人文学科論集(茨城大学人文学部) 一四

歴史学報(ソウル歴史学会) 八九

人文論叢(福岡大学研究所) 一三一―

富山大学人文学部紀要(富山大学人文学部)

四

西日本史学会宮崎支部報(西日本史学会宮

崎支部) 一九五〇―一九七九

革命と建設の英才金日成(朝鮮社会科学院)

チュチュエは自主の旗じるし(朝鮮社会科学

院)

不滅のチュチュエ思想(朝鮮社会科学院)

キム・イルソン(朝鮮社会科学院)

金日成、朝鮮労働党第六回大会中央委員会

報告(朝鮮社会科学院)

神道史研究(神道史学会) 二九―二

人文論叢(大阪市立大学大学院) 九

民族研究(北京民族研究所) 三

考古学報(中国社会科学院考古研究所)

一九八一―二

史料館所蔵史料目録(国立史料館) 三三

・三四

人文研究(神戸女子薬科大学) 八

竹内信仁著、財政活動の効果に関するマク

ロ動学分析(名古屋大学経済学会)

城島国弘著、社会のライフ・サイクル(名

古屋大学経済学会)

京都教育大学紀要A(京都教育大学) 五八

編集後記

秋風の気配が感じられる此頃ですが、会
員の皆様方には如何お過ごしでしょうか。
台風の被害等がないことをお祈り申し上げ
ます。

『史林』六五巻五号をお届けします。本
号も盛りだくさんの内容となりました。
定住・都市生活に欠くことのできない井戸
を考察した宇野隆夫氏、律令制下の官位の
実態に迫った虎尾達哉氏、江戸幕府の大名
統制における具体相を描いた笠谷和比古氏、
明末清初の民衆蜂起を多角的に検討した井
上徹氏の論説をはじめ書評・紹介を載録い
たしましたので、十分検討下さるようにお
願い申し上げます。(高敷)

史 林 (第六五巻第五号)

一九八二年八月二五日印刷 定価九〇〇円
一九八二年九月一日発行

発行人 史 学 研 究 会

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部

理事長 樋 口 隆 康
振替京都七五一五五番

印刷所 中村印刷株式会社
京都市下京区七条御所ノ内中町五〇